

式 辞

日一日と桜の開花が待ち遠しいこの佳き日、令和元年度第六九回日本大学鶴ヶ丘高等学校の卒業証書授与式をここに挙行いたします。この厳しい社会状況下ではありますが、本日、卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生はもとより教職員一同この上ない歓びであります。ここに学校を代表いたしまして、心より、御礼申し上げます。

三三四名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

早いもので、入学式から三年、皆さんは本日めでたく本校所定の課程を終え、卒業の日を迎えました。この日を迎えられたのは、皆さんの努力はもちろんですが、今日まで支えてくださった家族をはじめ、多くの方々のご指導やご協力のおかげでもあります。そのことに感謝の気持ちを忘れないでほしいと思います。

さて、卒業生のみなさんには、二つの言葉を贈りたいと思います。

最初に「素直な気持ちをもって、感謝をして生きる」ということ。

今、皆さんは将来への大きな夢を持っていると思います。古くから、偉大なる人たちは、逆境に抗いながらも、不屈の精神で生き抜き、夢を実現していった経験を多く持っています。

しかし、世の中は甘くない、現実には厳しいと我慢をしながら結局は夢半ばであきらめる人もいます。反対に、順風満帆に思われた夢への実現において、感謝を忘れ、自惚れ故に夢を壊してしまう人もいます。

また、あらゆる場面でAIと共存していくこれからの社会において、従来の考え方以上に、人としての強みをしっかりと育み、あふれ出て来る多くの情報から、事の本質を見抜く知識を持たなければ、夢をかなえられなくなる可能性も出てきています。

このような状況においても、最も大切なことは、その与えられた環境の中で「素直」に「感謝の気持ち」を持って生きていけるかどうかであると思います。

素直さを失ったとき、逆境は卑屈を生み、人は自分と向き合うことをやめてしまいます。

素直さは、人を強く、正しく聡明にしてくれる力だと思います。環境の違いを憂えるのではなく、厳しいときは素直にそれを受け入れ、うまくいっているときは、その環境に感謝をして、素直にまっすぐ伸びていく人になってほしいと思います。

二つ目は、「心の鏡を持ち続けていこう」

ということです。

本校には、昭和三十年代に、当時、日本大学総長であった永田菊四郎先生から贈られた等身大より大きな鏡があり、そこには「心」と書かれています。半世紀以上の間、皆さんも含めた三万人以上の卒業生・在校生が、その鏡に自分自身を映してきました。当時の第五代校長であった出口忠先生は、これを「心鏡」と命名し、生徒の教育の一環とされました。

登校したら先ず一人ひとりが、自分の姿をこの鏡に映し、自分自身の顔色を見て健康状態を判断するように。

第二には自分の姿。頭髪・服装が、鶴高生として恥ずかしくないか否かを判断せよ。

さらに、最も大切なことは、この鏡に『自分の正しい心』をうつすことだ。と生徒に話されていました。

身なりは鏡に映して正せるとしても、心のありようまでは、実際は映し出せはしません。ですから、人は自分の考えやふるまいの誤りを自覚しにくいのです。

皆さんは本校を卒業しますが、「心の鏡」は、謙虚な心さえあれば、随所に見つけることが出来ると思います。自分の周囲にある物の在り方やいる人も、これらはすべて自分の心の反映であり、「心の鏡」であると思います。素直な心で、自分の考え、自分のふるまいの正邪がそのままに映し出されている「心の鏡」を見つめていってほしいと思います。

結びに、保護者の皆様には、立派に成長され、鶴ヶ丘高校を巣立とうとしているお子様の姿をご覧になり、お喜びいかばかりかと存じます。

ここに、お子様の卒業のお祝いと、ここまで育てられたことに対し、敬意を表すとともに、三年間にわたっての本校に対する多大なるご支援とご協力に深く感謝申し上げます。

令和二年三月一日

日本大学鶴ヶ丘高等学校長

川原容子